

夏目漱石と〈京都〉

—— 小説『門』に於ける宗助と御米の出逢い ——

瀧本和成

一

夏目漱石の小説『門』は、一九一〇（明43）年三月一日から六月一二日まで東京・大阪両「朝日新聞」に連載された後、一九一一（明44）年一月春陽堂から単行本として刊行されている。この作品は宗助と御米の夫婦生活を中心に描かれている。まず、ふたりはどのような夫婦として登場し、形象されているか見てみよう。

宗助と御米とは仲の好い夫婦に違なかつた。一所になつてから今日迄六年程の長い月日をまだ半日も氣不味く暮した事はなかつた。言逆に顔を赤らめ合つた試は猶なかつた。二人は呉服屋の反物を買つて着た。米屋から米を取つて食つた。けれども其他には一般の社会に待つ所の極めて少ない人間であつた。彼等は、日常の必需品を供給する以上の意味に於て、社会の存在を殆んど認めてゐなかつた。彼等

に取つて絶対に必要なものは御互丈で、其御互丈が、彼等にはまた充分であつた。

宗助と御米は「一所になつてから今日迄六年程の長い月日を、まだ半日も氣不味く暮した事はなかつた。言逆に顔を赤らめ合つた試は猶なかつた」と語られているように、「仲の好い夫婦」として描写されている。しかしながら、ふたりが「社会一般」の夫婦でないところが冒頭部分から暗示的に形容されていて、その内実が中盤明かされて行く。

彼等は山の中にある心を抱いて、都会に住んでゐた。（中略）彼等は複雑な社会の煩を避け得たと共に、其社会の活動から出る様々の経験に直接触れる機会を、自分と塞いで仕舞つて、都会に住みながら、都会に住む文明人の特権を棄てた様な結果に到着した。（中略）社会の方で彼等を二人限に切り詰めて、其二人に冷かな背を向けた結果に外ならなかつた

(中略) 彼等の命は、いつの間にか互の底に迄喰ひ入つた。二人は世間から見れば依然として二人であつた。けれども互から云へば、道義上切り離す事の出来ない一つの有機体になつた。二人の精神を組み立てる神経系は、最後の繊維に至る迄、互に抱き合つて出来上がつてゐた。彼等は大きな水盤の表に滴たつた二点の油の様なものであつた。水を弾いて二つが一所に集まつたと云ふよりも、水に弾かれた勢で、丸く寄り添つた結果、離れる事が出来なくなつたと評する方が適當であつた。

(太字……筆者)

一見幸せそうな「仲の好い夫婦」だが、「社会の方で彼等を二人限に切り詰めて、其二人に冷かな背を向けた結果」、ふたりは「都会に住む文明人の特権を棄てた様な結果に到着」する。「山の中にゐる心を抱いて、都会に住んでゐる夫婦として形容されるのはそのためである。どうして宗助と御米夫妻が「水に弾かれた勢ひで、丸く寄り添つた結果、離れることが出来なくなつた」夫婦として描かれているのか。ふたりの在り様に世間一般の夫婦とはどこか違つている関係として描出されている原因は何処にあるのだろうか。

彼女は三度目の胎児を失つた時、夫から其折の模様を聞いて、如何にも自分が残酷な母であるかの如く感じた。自分が手を下した覚がないにせよ、考へ様によつては、自分と生を

与へたものの生を奪ふために、暗闇と明海の途中に待受けて、これを絞殺したと同じ事であつたからである。斯う解釈した時、御米は恐ろしい罪を犯した悪人と己を見做さない訳に行かなかつた。さうして思はざる徳義上の呵責を人知れず受けた。

御米が宗助との子を流産する場面は、彼女が「恐ろしい罪を犯した悪人」として自覚せざるを得ない状況を象徴的に表したところである。こうして宗助と御米、ふたりの現在と過去が交錯する形で物語は進行して行く。現在彼らが置かれている情態は、ふたりが一緒になる前後にその起因があり、その結果「徳義上の呵責を受けた」ふたりとして造型され、そのことと生活状況とを関わらせながら少しずつ語られて行く。そのふたりが出逢う場所が〈京都〉である。このふたりがどうして〈京都〉で出逢つたのか、それはふたりの現在の生活に暗い影を落としている原因であり、全てでもあるかのように描き出されている。本稿は、作品の主題と関つて作中描かれる〈場〉としての〈京都〉の意味を探りながら、作者漱石の意図に迫つて行きたい。

二

まず、宗助と御米がはじめて出逢う光景を抜き出してみよう。

宗助の此処を訪問したのは、十月に少し間のある学期の始めであつた。残暑がまだ強いので宗助は学校の往復に、蝙蝠傘を用ひてゐた事を今に記憶してゐた。彼は格子の前で傘を畳んで、内を覗き込んだ時、粗い縞の浴衣を着た女の影をちらりと認めた。(中略) 其日曜に彼は又安井を訪ふた。それは二人の關係してゐる或会に就て用事が起つたため、女とは全く縁故のない動機から出た淡泊な訪問であつた。けれども座敷へ上がつて、同じ所へ坐らせられて、垣根に沿ふた小さな梅の木を見ると、此前来た時の事が明らかに思ひ出された。其日も座敷の外は、しんとして静であつた。宗助は其静かなうちに忍んでゐる若い女の影を想像しない訳に行かなかつた。同時にその若い女は此前と同じ様に、決して自分の前に出て来る氣遣はあるまいと信じてゐた。此予期の下に、宗助は突然御米を紹介されたのである。(中略) 安井は御米を紹介する時、「是は僕の妹だ」といふ言葉を用ひた。

この時宗助は第三高等学校の学生で、実家が(東京)のため(京都)で下宿生活をしている。御米と出逢うのは右の描写の通り、宗助の友人安井の下宿においてである。安井は宗助と同じ第三高等学校の学生(同級生)で、やはり下宿住まいをしている。その安井の下宿ではじめて出逢うことが、その後の宗助と御米の二人の關係、あるいは安井を加えた三人の複雑な關係を予感させ

る。とくに安井が御米のことを「是は僕の妹だ」といふ言葉を用ひた」と表現されているところに彼らの微妙な關係が集約され示されている。友人安井の妹として登場する御米だが、ほんとうは妹ではなく、彼女(恋人)であり、同棲相手である。しかしながら、作品はそのことには直截的には踏み込まず、曖昧な形で進行して行く。次の引用は、宗助、安井、御米が三人で嵐山周辺に茸狩りに出掛けるシーンだが、この描写は宗助と御米ふたりの關係が(京都)を舞台に微細に変化する様を巧く表した部分である。

其内又秋が来た。去年と同じ事情の下に、京都の秋を繰返す興味に乏しかつた宗助は、安井と御米に誘はれて茸狩りに行つた時、朗かな空氣のうちに又新しい香を見出した。紅葉も三人で観た。嵯峨から山を抜けて高雄へ歩く途中で、御米は着物の裾を捲くつて、長襦袢丈を足袋の上迄牽いて、細い傘を杖にした。山の上から一町も下に見える流れに日が射して、水の底が明らかに遠くから透かされた時、御米は「京都は好い所ね」と云つて二人を顧みた。それを一所に眺めた宗助にも、京都は全く好い所の様に思はれた。斯う揃つて外へ出た事も珍らしくはなかつた。

それまで無聊な学生生活を送っていた宗助が、御米と出逢い、同じ空間で時間を共有することによって(京都)のイメージが豹

変する場面として重要である。御米は言う「京都は好い所ね」と。それに呼応して宗助は「京都はまったく好いところ」だと思ふ。退屈で辟易していた京都での生活が、一人の異性の出現によって一変する。それは宗助と安井との関係を変容させることも意味している。宗助は第三高等学校に入学して以来、安井が唯一の友人で、大きな存在として描かれている。

安井へ送る絵葉書へ二三行の文句を書いた。其内に、君が来ないから僕一人で此所へ来たといふ言葉を入れた。翌日も約束通り一人で三保と龍華寺を見物して、京都へ行つてから安井に話す材料を出来る丈拵えた。(中略)夫から一週間程は、学校へ出るたんびに、今日は安井の顔が見えるか、明日は安井の声がするかと、毎日漠然とした予期を抱いては教室の戸を開けた。さうして毎日又漠然とした不足を感じては帰つて来た。

学年を終え、新年度までの間帰郷した折、宗助はわざわざ新学期に安井に会つた折の話題作りのために、もともと安井と一緒に旅をする予定だった興津見物(三保の松原、龍華寺)をする様が描かれているが、それはこの時の宗助が何より安井との時間の共有が大切であったかを物語っている。宗助と安井が学校を舞台に育んだ友情が、御米という一人の女性の登場によって断ち切られて行くのである。人間の関係の脆さと同時に恋愛のもつ熱情がい

かに強いものであるかが、すでに御米との出逢いの前後安井との関係で見事に映し出されている。

宗助と御米、このふたりが、どんどん接近して行く様が次の展開場面である。友人の妹と説明を受けた危うさのうえに成り立つ関係が、より宗助と御米を近づけることとなる。そのように配慮されて描かれており、それはこの作品の全体を蔽う特徴の一つである。微妙な関係が危うさを含みながら進行して行くのが、本来の人間関係であり、それが効果的に描出される。

家の中で顔を合はせる事は猶屢あつた。或時宗助が例の如く安井を尋ねたら、安井は留守で、御米ばかり淋しい秋の中に取り残された様に一人坐つてゐた。宗助は淋しいでせうと云つて、つい座敷に上り込んで、一つ火鉢の両側に手を翳しながら、思つたより長話をして帰つた。或時宗助がぼかんとして、下宿の机に倚りか、つた儘、珍しく時間の使ひ方に困つてゐると、ふと御米が遣つて来た。其所迄買物に出たから、序に寄つたんだとか云つて、宗助の薦める通り、茶を飲んだり菓子を食べたり、緩くり寛ろいだ話をして帰つた。

安井の留守中に彼の下宿でふたりは会話を交わす。また、御米が宗助の下宿に突然訪ねて来る。友人の「妹」という表向きな関係が、割合容易に物理的に(世間体からみて)抵抗も少な

く二人を接近させると共にその危うい関係がむしろふたりをして惹かれ合う要素となっている。本文中からも推されるように、ふたりは「淋しい」なかでお互いが惹かれ合うように描かれる。人間は常に危うさの中に存在していて、そのことが生きることの逆説的な証であるかのように描いて見せている。偶然出逢ったふたりが、境遇に逆らつて、あるいはその境遇ゆえに離れ難き仲になつて行くのである。しかしながら、彼らふたりの環境は当然ながら生易しいものではなく、厳しい状況を作り出すこととなる。

曝露の日がまともに彼等の眉間を射たとき、彼等は既に徳義的に痙攣の苦痛を乗り切つてゐた。彼等は蒼白い額を素直に前に出して、其所に焔に似た烙印を受けた。さうして無形の鎖で繋がれた儘、手を携えて何処迄も、一所に歩調を共にしなければならぬ事を見出した。彼等は親を棄てた。親類を棄てた。友達を棄てた。大きく云へば一般の社会を棄てた。もしくは夫等から棄てられた。学校からは無論棄てられた。たゞ表向丈は此方から退学した事になつて、形式の上人間らしい迹を留めた。是が宗助と御米の過去であつた。

宗助と御米は、一緒になる選択をする。それは結果としてふたりに「徳義的に痙攣の苦痛」を招き、「焔に似た烙印を受け」

ることになる。ふたりは、「親」、「親類」、「友達」、「大きく云へば一般の社会を棄てた、もしくは棄てられた」のである。こうした宗助と御米の陥つた状況を語り手は過去形でたんと述べている。作者は、宗助と御米の感情を彼等からの直接の心情の吐露として描くのではなく、(距離感のある)語り手を導入することによつて、ふたりの形象が極めて個人的で特異な関係としてではなく、私たち近代人が生きていくうえで味わわなくてはならない普遍的な問題あるいは関係として転化(昇華)させている。それは、語り手の役割を明確に示すものであると同時に、時間構成にも密接に関連している。この作品は、宗助と御米のふたりが出逢い、そして関係が密になつて行く様子が、直線的な時間の経過(推移)の中では描かれておらず、冒頭部分に於いてふたりの夫婦生活がまず描き出されていることからそれは明白である。ふたりが京都で出逢うシーンは、むしろ物語半ばで描かれる。それは、少なくとも二つの意味(要素)を含んでいるように思われる。第一は、二人が陥つた状況を描き出すこと、あるいはその意味を問うことがこの作品の主眼であることを物語っているということ。そのために意匠を凝らす構成となつていことがわかる。第二は、ラストシーンにおいても冒頭書き出し場面と連続する形で同じ時間軸となつており、いわば出逢いの場面が入れ子型形式で描写されているということ。時間の逆戻り(回想場面の設定)によつて、物語の虚構性が發揮され、それによつて劇的な臨場感を味わうことができる

仕掛けとなっている。そして、人間の現実生活において起こる原因と結果が、むしろこの作品では結果が原因を浮き立たせるよう設定されていると言える。そうした時間構成に沿って作品の時間軸は、現在が〈東京〉、過去は〈京都〉を舞台として設定され、物語が展開するよう図られている。

三

次に登場人物たちの心情の変化や時間構成と絡み合いながら描かれる回想場面としての〈京都〉の意味について探って行こう。作品中での舞台〈京都〉の意味を探るに当たって、漱石が〈京都〉を描いた他の作品に触れておきたい。漱石が〈京都〉に来た時の心境（思い出）を綴った文章に「京に着ける夕」がある。正岡子規との〈京都〉での思い出を重ねる形で記された随筆である。

京は淋しい所である。(中略)此淋しい京を、春寒の宵に、疾く走る汽車から会釈なく振り落された余は、淋しいながら、寒いながら通らねばならぬ。(中略)東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた。昨日迄は擦れ合ふ身体から火花が出て、むく／＼と血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて総身に煮込み出はせぬかと感じた。東京は左程に烈しい所である。此刺激の強い都を去つて、突

然と太古の京へ飛び下りた余は、恰も三伏の日に照り付けられた焼石が、緑りの底に空を映つさぬ暗い池へ、落ち込んだ様なものだ。

引用本文中「淋しい」、「寒い」という言葉がそれぞれ三回も繰り返されて表現されているのが、目を惹く。漱石は、〈京都〉を「淋しい所」だと感じている。それは冬の〈京都〉が気候的に「寒い」という意味のほかに、〈東京〉と比較しての言葉である。ここにも注意しなくてはならない。「擦れ合ふ身体から火花が出て、むく／＼と血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて総身に煮込み出はせぬかと感じ」るぐらい〈東京〉は「烈しい所である」と述べていることからそれはわかる。漱石は〈京都〉の寒さに「淋しさ」という感情を連ねて感じているということになる。その「淋しさ」はもちろん先述した通り、子規との思い出と無縁ではない。

始めて京都に来たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規と一所であつた。麩屋町の柵屋とか云ふ家へ着いて、子規と共に京都の夜を見物に出た(中略)子規は死んだ。(中略)あ、子規は死んで仕舞つた。糸瓜の如く干枯びて死んで仕舞つた。(中略)余は寒い首を縮めて京都を南から北へ抜ける。

子規の死が、漱石に楽しかった子規との〈京都〉での旅を一層感慨深いものにし、「淋しさ」が込み上げてくる状況を醸し出している。「あ、子規は死んで仕舞った」という感情の発露がそれを物語っている。それはかけがえのない友人を失ったどうしようもない「淋しさ」、孤独感と結び付いている。漱石の文芸観や生き方を受け止めてくれ、かつ理解してくれた友人子規の存在がいかに大きかったかが、この文章を通して伝わってくる。それと重なる形で近代人の「淋しさ」が表出されているのが、この作品のもう一つの特徴である。この随筆は子規との交情と別れ（邂逅と別離）という個人的体験から、近代人が陥らざるを得ない状況としての「淋しさ」を連続させて表現していると言える。この時期〈東京〉は日本に於いて最も近代化が進む都市だが、近代化の真つ最中の〈東京〉では、ほとんどの人は「淋しさ」を感じている暇がない。皆忙しいのである。「擦れ合ふ身体から火花が出るくらい」「熱く」「烈しい」所なのである。その新都〈東京〉をしばし離れたとき、漱石は近代という時代に生きる我々が持たざるを得ない心境である「淋しさ」を「太古の」昔から都（日本の中心、新文化の担い手であり、発信地）として存在続けた〈京都〉、その「千年の歴史を有する」〈京都〉に、古都の有り様を感じしながら実感したのだと言えよう。それは二度目の〈京都〉旅行の折、「旅に寒し春を時雨れの京にして」（日記一 明40・4・1付）と詠んだ漱石の胸中にすでに去来していた感情であったかもしれない。

近代人が根底に抱えざるを得ない「淋しさ」は、同じ〈京都〉を舞台に描かれた小説「虞美人草」²⁾においても東京との対比で人物形象に生かされ描かれていると言えよう。

虞美人草は毎日かいてゐる。藤尾といふ女にそんな同情をもつてはいけない。あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。徳義心が欠乏した女である。あいつを仕舞に殺すのが一篇の主意である。（中略）小夜子といふ女の方がいくらか憐だか分りやしない。

これは、漱石が『虞美人草』について小宮豊隆宛書簡（明40・7・19付）で記している文章である。書簡中漱石は、小野清三との結婚をめぐる三角関係が描かれる中で、虚栄心の塊とでもいふべき「徳義心が欠乏した女」性甲野藤尾と五年間も小野を未来の夫としてひたすらおとなしく待ち続ける「過去の女」ともいふべき「可憐」な女性井上小夜子とを対比している。この小説は〈東京〉と〈京都〉をそれぞれの登場人物の住居の場（生活圏）として描き、彼女らを交わらせることによって、衝突が起きるように配（設定）されている。藤尾を〈東京〉に住ませ、一方の小夜子は〈京都〉に「古への人」であるかのような父と二人で暮らしている。こうした〈東京〉と〈京都〉を絡めた二人の形象の対比は、先述の「京に着ける夕」でのそれと通底している意識であると言えるだろう。

それは、小説『こゝろ』においても近代に於ける普遍的な問題として提出されている。

「私は淋しい人間です」と先生は其晩又此間の言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、ことによると貴方も淋しい人間ぢやないですか。(中略)先生は斯う云つて淋しい笑ひ方をした。(中略)私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう」

『こゝろ』の「先生」をして個人主義という新しい価値観を生んだ「現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう」と語らせる箇所は、作者の近代(社会)観が滲み出ており、作品『こゝろ』の主題の一つであると言えるだろう。漱石は、この作品で「先生」の孤独が単なる個人的経験だけに留まるものではなく、近代人の「淋しさ」を時代の孤独として描出しているのである。作品『門』に於いてもそれは共通しており、宗助と御米夫妻の形象を通して近代人の「淋しさ」、孤独を表出させているのである。ただその時大事なことは宗助と御米夫婦を単純な形の近代人の孤独として描き出しているのではないことも留意しておかなくてはならない。安井という宗助にとつてかけがえのない友人(御米にとつては元恋人)を裏切つて

も一緒になろうとするふたりにとつて、当然背負わなくてはならない表象としての孤独と暗さなのである。そこに近代人の自我の底に存在するエゴイズムが潜んでおり、三角関係の中で起り得る状況として近代社会の倫理観の問題と併せて描出して見せたのである。

宗助は家へ帰つて御米に此鶯の問答を繰り返して聞かせた。御米は障子の硝子に映る麗かな日影をすかして見て、「本当に難有いわね。漸くの事春になつて」と云つて、暗れながら、「うん、然し又ちき冬になるよ」と答へて、下を向いたま、、鉄を動かしてゐた。

というラストシーンは、この二人の生の空間を示していると共に宗助と御米がこれからも過去を背負つて生きて行かなければならない状況を見事に表現している。冒頭とラストの時間軸が同じ針を指すように設定することによつて、作者は現在の二人を照射することに力点を置くのである。それは、宗助と御米夫妻からむしろ近代人の在り得べき関係を描出したと言つてよい。そういう視点から見れば、この作品は逆説的な理想の夫婦像を描いて見せた作品であると言えないだろうか。何かを得ようと思えば、何かを犠牲にしなければならぬと悟ること。それは、欲望というものが再生産されて行く近代資本主義社会に生きる人間への処方

箋であると同時に警鐘でもある。それは利己主義の欲望に塗れて行く近代人への批判摂取として見なすことが可能であり、そこに「静かな」世界に閉じ籠るふたりを造型する最大の理由があつたと考えられる。結果「こんな風に淋しく睦まじく暮ら」す宗助と御米夫婦が語られるのである。

四

近代社会が生み出す様々な欲望、近代人に特有の欲深について、漱石は「私の個人主義」で次のように述べている。

個人主義といふものは、(中略)党派心がなくつて理非がある主義なのです。朋党を結び団隊を作つて、権力や金力のために盲動しないといふ事なのです。夫だから其裏面には人に知られない淋しさも潜んでゐるのです。既に党派でない以上、我は我の行くべき道を行く丈で、さうして是と同じに、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。其所が淋しいのです。

この評論は、一九一四(大3)年一月二五日に学習院・輔仁会の依頼で行われた漱石の講演記録である。ここで漱石は、「個人主義といふものは」「党派心がなくつて理非がある主義」

であることを説いている。そのうえで「朋党を結び団隊を作つて、権力や金力のために盲動しない」ように戒めていることが重要である。近代という同時代に生きる若い世代の学生たち(未来の近代日本社会の担い手たち)に向けて、近代資本主義社会が経験する疎外状況を認識することの必要性と、そこに生きる人間の弱さや社会で生きるといふことの意味を「自己本位」、あるいは「個人主義」の持つ特質の両面を指摘する形で、自己の英国留学体験を披露しながらわかりやすく説明し、日本近代社会の問題点を提示している。左記の引用文からも明らかのように、この評論(講演記録)は近代社会に潜む欲望と対の関係で、人間に「淋しさ」が存在していることも解き明かしている。個人主義を貫いて行く「ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。其所が淋しいのです」という言葉には、漱石の孤獨なる魂の叫びが諦めと似た形で言い表され(表現され)ているようである。

近代社会が孕む問題を抉り出し、それらと対峙しようとする漱石の態度は、たとえば新設された京都帝国大学文学英文学教授に招聘された時の辞退理由にも表れている。漱石は学長狩野亨吉(へ次)のような文面の書簡(明39・10・23付)を返信として書き送っている。

京都はい、所に違ない。(中略)一体がユツタリして感じがい、だらう。そんな点で東京と正反対だらう。僕も京

都へ行きたい。行きたいが是は大学の先生になつて行きたいのではない。遊びに行きたいのである。自分の立脚地から云ふと感じのいい、愉快の多い所へ行くよりも感じのわるい、愉快の少ない所に居つてあく迄喧嘩をして見たい。(中略) 僕は世の中を一大修羅場と心得てゐる。さうして其内に立つて花々しく打死をするか敵を降参させるかどつちにかして見たいと思つてゐる。(中略) 社会一般の爲めに打ち斃さんと力めつゝある。而して余の東京を去るは此打ち斃さんとするものを増長せしむるの嫌あるを以て、余は道義上現在の状態が持続する限りは東京を去る能はざるものである。

手紙の内容から、漱石が(東京)で住むことに拘つている様子が窺われる。(東京)に居続ける決意が述べられているところがひと際目立っているように感じられる。「僕は世の中を一大修羅場と心得てゐる。さうして其内に立つて花々しく打死をするか敵を降参させるかどつちにかして見たいと思つてゐる」という言葉には、近代社会の矛盾点を凝視しようとする漱石の態度が明確に顕されていて興味深い。「余の東京を去るは此打ち斃さんとするものを増長せしむるの嫌あるを以て、余は道義上現在の状態が持続する限りは東京を去る能はざるものである」という一文には近代社会を見定めようとする漱石の覚悟が、(東京)で生活すること重ねて示されていることがわかる。こうした

態度は、「門」をはじめとする数々の作品の中で主要テーマとして描出されていることから明らかであろう。そして、漱石が追求し続けた問題が、小説において逆説的に複雑な人間模様の中で展開されて行くのが、小説の世界であり、それは虚構に於いて最も發揮されることを知る漱石の文学観と通じている。さまざま諸相が複雑に絡み合いながら進行して行くなかで、人間の生は単純ではなく、その複雑さゆえに微妙に揺れる心情や繊細さゆえの弱さが厳しい環境の中で露呈して行くのである。漱石はそのような世界を象徴性や暗示性を巧みに言葉に表象しながら描き、人間の本質に迫るべく意図している。私たち読者はそうした人間の本質なるものを作品から掴み取ることが試されている。作者の意図ゆえに描かれた場面と作者の意図にかかわらず現在私たちが考え、追求しなければならぬ課題を作品は提示しているのである。その意味からすれば、この作品に於ける(場)は、作者の鋭利な意識が強く働いている箇所だと言える。(場)の設定と構成意識が、近代人の細心のこころ模様と近代社会の深海を最小にして最深の縮図として効果を發揮している。「門」に於いては、宗助と御米夫婦が生きる小世界が、実は近代人と近代社会の最小単位として、縮図して見せた空間なのである。その中でひっそり静かに暮らすことを余儀なくされているふたりがいる。

小説「門」は、ひとりの理解者、あるいは共生者がいれば我々

は近代社会に潜む孤独と共存できることを気づかせてくれる。自己本位に生き（ようとす）る近代人が、感じざるを得ない「淋しさ」、その孤独感を共有すること、そこに近代人のエゴイズムを制御する鍵が匿されていると考えた作者漱石がいる。現代人は明治の近代知識人の生き難さの延長線上で生活しているのであり、宗助と御米のふたりの生き方は、まさに現在を生きる私たちを照射しているのである。そういう意味で、「門」はまさに近代（人）が共有せざるを得ない「淋しさ」を実感する物語として措定された（また逆措定としても成立する）作品である。宗助と御米、「淋しさ」を共有するふたりが惹かれ合い、接近して行くこの物語は、〈京都〉という舞台（場）が「京に着ける夕」など他の作品で語られた「淋しさ」の位相と共通し、それらを包含する形で意味づけられており、ふたりの人生の転回点として位置づけられるだろう。

註

- (1) 「大阪朝日新聞」上・中・下（明40・4・9～11）
- (2) 初出は、「東京朝日新聞」及び「大阪朝日新聞」（全一・二七回、明40・6・23～10・29、ただし、「大阪朝日新聞」は10・28で終了）。初版は、一九〇八（明41）年一月春陽堂より刊行。
- (3) 初出は、「東京朝日新聞」及び「大阪朝日新聞」（全一・一〇回、大3・4・20～8・11、ただし、「大阪朝日新聞」は8・17で終了）。初版は、一九一四（大3）年九月岩波書店より刊行。
- (4) 初出は、馬場勝弥後援会編『孤蝶馬場勝弥氏立候補後援 現代文集』（実業之世界社 大4・3）で、「輔仁会雑誌」第九五号（学習院輔仁会 大4・3）にも掲載されている。

※本文引用は、初出及び初版を参照しつつ、原則として『漱石全集』全二八巻・別巻一（岩波書店 '93・12～'99・3）を使用し、旧字は新字に改めた。

（たきもと・かずなり 本学教授）